房総の山のフィールド・ミュージアム　ニュースレター

しいむじな

発行
千葉県立中央博物館
房総の山のフィールド・ミュージアム

連絡先
〒260-8682
千葉市中央区青葉町955-2
TEL：043-265-3111
http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/

2017（平成29）年3月発行

2017・春
56

特集

春を告げる 小糸川流域のどんど焼き

君津市市宿のどんど焼き

二月三日午後六時前後になると、小糸川流域のあちらこちらで、正月のお飾りを燃やす大きなたき火が焚かれます。「どんど焼き」と呼ばれているものです。

「どんど焼き」「どんと焼き」と呼ばれる行事は東北から九州にかけて広く行われていますが、いずれも一月十四日・十五日の小正月に行われます。

なぜ、小糸川のどんど焼きは二月三日の節分に行われるのでしょうか。その謎を探ってみたいと思います。

（島立　理子）

房総の山のフィールド・ミュージアムとは

清和県民の森を中心とした房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館が中心となっておこなっている新しい博物館活動です。観察会の開催、君津市立三島小学校での「教室博物館」開設に加え、地域の人々と協働で資料の収集や調査・研究等をおこなっています。

コラム

房総丘陵の動植物（4）

房総半島には、クマがいない。

房総半島にはクマがいません。本州でクマが出てこない都府県は千葉県だけだということを千葉の方々に話すと、よく驚かれます。そして、「東京や大阪にもクマはいるの？」「クマは山奥の動物だから、日本でも山が深い県にしかいないのでは？」という質問が返ってきます。いったい、クマはどんな場所に出てくるのでしょうか？

日本には二種のクマ科動物が生息しています。北海道のみに生息するヒグマと、本州以南に分布するツキノワグマです。本州でクマというと、ツキノワグマを指します。体重は70～120キログラム、鼻先から尻尾の付け根までが120～145センチメートルで、大型犬よりも一回り以上大きいです。全身が黒く、胸に月の輪模様がありますが、まれに模様がないただの黒いクマも存在します。植物が中心の雑食性で、ブナやクリ、ヤマブドウなどの果実、木の新芽、アリやハチなどを好んで食べます。

ツキノワグマはアジアに広く分布し、ロシアの沿海州から中国東北部、台湾、東南アジア、ヒマラヤ山脈からイランにかけて生息しています。日本のツキノワグマは、九州では一九四一年の宮崎県での捕獲記録を最後に明確な野生個体の記録なく、絶滅したと考えられています。四国では、推定個体数が多くても数十頭ほどとされ、絶滅が危惧されています。本州では、中国地方や紀伊半島、下北半島では個体群の絶滅の恐れがあるとされていますが、下北半島を除く中部地方以北では分布がほぼ安定しています。

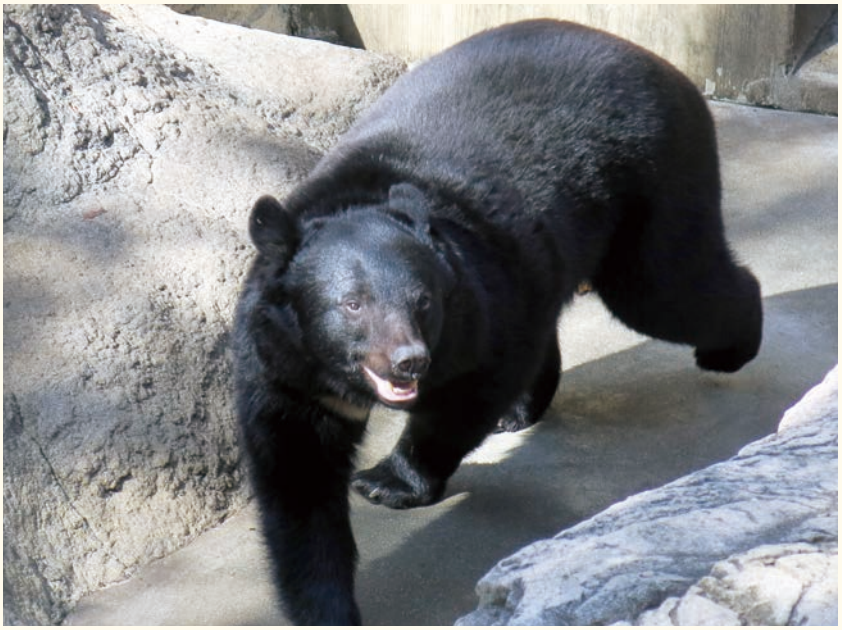
これまで、本州34のうち31都府県にツキノワグマが生息しており、千葉県だけでなく大阪府や茨城県も、ツキノワグマが「恒常的には住んでいない」（つまり、定住していない）とされてきました。ちなみに、東京都では奥多摩などにツキノワグマが生息しています。

しかし、近年そうしたツキノワグマの分布に異変が起きています。大阪府の北部では二〇〇〇年代以降に出没が確認されるようになりました。茨城県では二〇〇六年に県北西部で交通事故個体が回収され、昨年は養蜂場の巣箱が壊される被害にあうなどしています。最近の15年ほどの間で、本州でクマが出ないのは千葉県だけになってしまったのです。

では、千葉県にはいつ頃からクマがいないのでしょうか？　関東北部では洞窟などから後期更新世（約12万～1万年前）のクマ類の化石が出土しています。しかし、千葉県内からはクマ類の化石が見つかっていません。県内の縄文遺跡からも、クマ類の骨などは出土していないようです。その後、明治から昭和二十年頃の郡町村誌にもクマ類の生息情報はないようです。どうやら、千葉県には少なくとも縄文期以降の数千年間は、クマ類が生息していなかったと推測されます。これは私の勝手な推測ですが、縄文期の海進で房総半島が「島」として孤立していた時期に、広い行動圏が必要なクマ類が小さな「島」で暮らしていけなかったのではないかと考えています。現在のツキノワグマが生息する小さな島は、四国と、海外では中国の海南島くらいしかありません。

関東地方には分布しているのに千葉県に生息していない哺乳類は、クマ類以外に、ニホンカモシカ、ムササビ、ニホンモモンガ、ヤマネ、樹の穴に住むコウモリ類、一部のモグラの仲間などがいます。たとえば、ムササビは縄文遺跡からは骨が見つかり古墳時代の埴輪のモデルになっているものの、明治から昭和二十年頃までの文献から生息情報が得られません。そのため、縄文時代から近代までに絶滅した可能性が指摘されています。ある動物が生息していないと、ニホンカワウソのようについ最近の人間社会の影響で絶滅したとイメージしがちですが、どうやら千葉県の一部の哺乳類に関しては、もっと昔から生息していないようです。「いない」生き物に注目してその理由を推理するのも、意外と面白いものです。

（下稲葉　さやか）



ツキノワグマ（上野動物園にて下稲葉撮影）

特集

春を告げる小糸川流域のどんど焼き

昭和二年（一九二七）刊行の『千葉縣君津郡誌』に君津郡内の節分について、次のように記されています。

「三日は冬と春との境にて之を節分といふ（中略）、年男は枡へ炒豆を入れ「福は内鬼は外」と叫びつゝ、座敷其他室内へ撒くこれを追儺おにやらひ、豆内、豆撒き、鬼外などという（中略）夜に入れば神社の境内或は其附近にて篝火（かがりび）を焚くこれにて暖を取れば悪霊に罹ることなしといへは人多く集り来る火熾（さか）んに燃え揚がるや児童は『鬼がまけて鹿島が勝ったニョンニョンヤアイ』と囃子立つ（後略）」（ルビ筆者）

節分の行事の豆撒きの事を、「追儺（ついな）」「鬼やらひ」と呼んでいたこと、夜になると大きな火が焚かれていたことがわかります。

「追儺」とは、平安時代の宮中で旧暦の大晦日の日に行われていた鬼払いの儀式です。新年にあたって邪気を払うためのものでした。この儀式が節分の起源であると考えられています。

節分とは立春の前の日の事で、新暦（太陽暦）では二月三日前後に一定していますが、旧暦では正月と立春が同じ頃になるので、正月行事の一環としてとらえられていました。節分の事を「年越し」と呼ぶ地域もあります。つまり、旧暦であった当時には、節分にお飾りを燃やす事はありえないのです。

京都の平安神宮や吉田神社では、追儺の儀式終了後にお札などを焼く大きな火を焚く神事が行われます。小糸川流域のどんど焼きは、節分の大火を焚く神事が起源であることがわかります。

また、子どもが唱える「鬼がまけて鹿島が勝った」の、「鹿島」は鹿島神、茨城県鹿嶋市にある鹿島神宮の祭神の事です。疫病や災いから村を守ってくれる神として、村境などに祀られています。この囃子詞は「村に入ろうとした鬼や災いと鹿島神が戦って、鹿島神が勝った」という事、新年にあたって邪気を払った行事であることがわかります。

一月十四・十五日に行われるどんど焼きは、平安時代に宮中で行われていた三毬杖（さぎちょう）が起源といわれ、民間に広がり門松・しめ縄・書き初めなどを持ち寄って焼く、悪魔払いの行事で、正月を送る意味も含まれていると考えられています。

このように小糸川のどんど焼きと、一月十四・十五日に行われるどんど焼きは、もともと別物であったことがわかります。新暦が普及し、立春が正月の一ヶ月後になった事で、お飾りなどを立春の大火で焼くことが可能になり、現在のような形に変化していったのでしょう。

小糸川のどんど焼きは春を迎えるための行事ともいえるでしょう。

（島立　理子）

写真左：1月15日に行われる佐倉市西御門のどんど焼き。
どんど焼きの火でお餅を焼いて食べると風邪をひかないと言われている。

写真右：君津市植畑の「どんど焼きの」やぐら。竹の芯とわらで作られている。

観察会報告

泥だんごで学ぶ地質学

12月10日に清和県民の森で観察会「泥だんごで学ぶ地質学」を開催しました。当日は晴天に恵まれ、幼児から60代までの参加者のみなさんは時の経つのも忘れ泥だんご作りに熱中しました（写真❶）。講師の大木淳一研究員の指導を受け、山の斜面から採取した土を丸く固め、「魔法の砂」を繰り返しかけて整形し、最後に布で丁寧に磨くと、見事に輝く泥だんごができあがりました（写真❷）。泥だんごを作った後には、細かい粘土の粒を顕微鏡で観察したりして、泥だんごが光る理由や、房総丘陵の大地の成り立ちを学びました。

（2016年12月10日　清和県民の森にて　尾崎　煙雄）

連載　小櫃川流域の生きもの

ハヤブサ ～冬の平地に現れる～

「今日はどこに？」と近所の人。「そう、盤洲干潟の野鳥観察にね。」

干潟の渚に小波が寄せ、数十羽のハマシギがチョコ、チョコと動き回りえさをとっています。

すると突然、ハマシギが一斉に飛び立ちました。

その瞬間、ハヤブサが地面から１mの高さに直球を投げたように猛スピードで水平に飛んでいきます。脚に何かつかんでいます。そして、干潟の流木に止まりました。

つかんでいたものはムクドリより大きい灰色の野鳥です。

人々が、流木の近くの海で船を浮かべて貝をとっています。それにもかかわらず、ハヤブサは捕らえた野鳥を脚でしっかりと押さえ、何度もくちばしで肉をつまみ、引きちぎって食べていました。約30分後に陸地へ飛び去っていきました。

「捕らえた野鳥は何か？」と気になったので、流木へ確かめに行きました。残っていたのは羽毛が付いた上のくちばしと小骨だけで、脚などはありません。見事にきれいに食べていました。

「よほどお腹が空いていたのだろう」と感じました。

干潟の砂地には羽毛が落ちていました。捕らえた野鳥はくちばしの形や羽毛からヒヨドリだと思いました。

ハヤブサは冬に小櫃川周辺の平地に現れます。

彼らの来訪は、小櫃川流域の平地と海が冬季、多くのえさになる野鳥が訪れる豊かな自然のあかしです。

（文・写真　千葉県立中央博物館ボランティア　成田　篤彦）

写真１：ハヤブサ　干潟の流木に止まる（2016年12月木更津市）

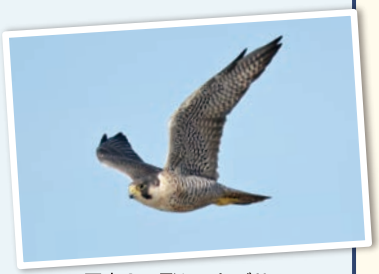


写真２：飛ぶハヤブサ（2014年12月木更津市）

MEMO　ハヤブサ目　ハヤブサ科

国指定絶滅危惧Ⅱ類、千葉県指定重要保護生物、カラスとほぼ同大、南極大陸を除く世界中に分布。日本では全国に分布するが、繁殖数は少ない。河口や干潟、湿地、耕作地など開けた場所で観察される。ずばぬけた飛行力をもち、主にヒヨドリやハト大の鳥を捕る。

しいむじなの由来

房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

編集後記

２月の末から、君津市松丘・亀山地区の用水路「二五穴」の掃除の様子を撮影させていただいています。狭い穴の中の掃除など何日もかけて水を田んぼに引いていきます。とても大変な作業です。田んぼに欠かせない水のありがたさをしみじみと感じました。